

大規模修繕
スタートの年

住まいと心の「若返り工事」



《発行所》
若葉台
第一住宅管理組合
坂戸市千代田4丁目7番30号
電話 049-283-7950
メール kanri@wakaba1.com
http://www.wakaba1.com/

「人生80年にたとえると若葉台第一住宅は40代にさしかかり、まだまだ元気だけれども無理がきかなくなった、疲れが残る、筋肉痛が二日後に出る、老眼が始まったぐらいいの年にあたります。今回の工事は、傷んだ筋肉(躯体)をよみがえらせ、皮膚(外壁)や頭皮(防水)も補強します。呼吸器系(サッシ、ドア)や消化器系(排水)も徹底的に直します。もう一

「今年から大規模修繕工事が始まります。団地の修繕計画のコンサルティングを担当している建築家の宮城秋治さんに、こんな質問をしました。『今回の大規模修繕工事を人間の体の治療法にたとえたら、どんな処方箋になりますか』 宮城さんの答えはこうです。『人生80年にたとえると若葉台第一住宅は40代にさしかかり、まだまだ元気だけれども無理がきかなくなった、疲れが残る、筋肉痛が二日後に出る、老眼が始まったぐらいいの年にあたります。今回の工事は、傷んだ筋肉(躯体)をよみがえらせ、皮膚(外壁)や頭皮(防水)も補強します。呼吸器系(サッシ、ドア)や消化器系(排水)も徹底的に直します。もう一

団地の年齢はまだ40代

度若返りを図り、折り返しの人生を謳歌するためにの再生医療に近いものと言えます。多少時間がかかりそうですが、入院せずに通院で治療ができそうです。

澄んだ冬空の下に立つ姿には、まだアラ・フォーの魅力が残っていると見るのは、身びいきでしょうか



桜の木は一言もしゃべらないけれど大地にはえた根が、何と多くのことを語りかけてくれていることでしょう <12号棟前のオオシマザクラ>

- 1面: 住まいと心の若返り工事
- 2面: 原ちず子さんと語らう
- 3面: 終の棲家とふるさと
- 4面: 30年の歳月に想う

CO₂削減にも貢献

鉄筋コンクリートの骨組み自体は100年持たせることも可能です。でも給排水設備、サッシ、ドア、防水など生活に密着している機能や装置や空間の寿命が、はるかに短いのです。しかも集合住宅では、そうした機能や装置の共用部分が多く、修理や更新をする場合には、共同で同時に行わなければならない宿命を背負っています。今年はそのれと向き合う年です。私たちの団地が建設されてから30年の間に、建築基準法が何度も改正されるのも、気密性と断熱性を高め室内の光熱費の削減を図るためです。「サッシとドアの取替えてエコポイントを獲得できたから、時代の変遷をうまく捉えた大規模修繕工事と評価されます」は、宮城さんのアドバースです。「サッシとドアが新しくなると空気の流れが止まり、室内の環境が変わります。換気がよくないと室内の水蒸気が飽和して壁に結露が発生します」と、居住者の換気に対する意識の大切さを、宮城さんは指摘します。体と同じように、日頃の摂生、養生、適度な運動などの健康管理しだいで、再生治療の効果が左右されるのです。10億円の融資を受けて居住環境の若返りを図るのですから、ついでに私たちも心を若返らせてみてはどうでしょう。そのほうが「終の住棲(すみか)」でも楽しいではありませんか。

日頃の健康管理が大切

「サッシとドアが新しくなると空気の流れが止まり、室内の環境が変わります。換気がよくないと室内の水蒸気が飽和して壁に結露が発生します」と、居住者の換気に対する意識の大切さを、宮城さんは指摘します。体と同じように、日頃の摂生、養生、適度な運動などの健康管理しだいで、再生治療の効果が左右されるのです。10億円の融資を受けて居住環境の若返りを図るのですから、ついでに私たちも心を若返らせてみてはどうでしょう。そのほうが「終の住棲(すみか)」でも楽しいではありませんか。

文字摺草

文/佐藤正則
写真/中岡昌治

坂戸市に「千代田」の地名が登場したのは1951年(昭和26)です。それまでは現在の千代田地区は「飛行場」「富士見開拓」と呼ばれていたそうです▼敗戦で海外から引き揚げてきた人たちが、陸軍坂戸飛行場の跡地の開拓に汗を流していたのです。「当時は坂戸飛行場の宛名で手紙も届きました。しかし地名がないのも困るので、何か名前をつけよう」と意見を出し、千代田と名付けました▼「変わりゆく千代田・開拓編」に掲載されている貴重な証言です。硬く固められた飛行場跡地を、粗末な農機具で必死に開墾した人たちが、その畑地に子孫の永代の繁栄を託し「千代田」と命名した気持ちが伝わってきます▼東京都の「千代田区」は、江戸城の別名・千代田城が由来とされています。千代田村、宝田村、祝田村のあった地に太田道灌が築城したからです。東京都千代田区千代田1番1号が皇居、坂戸市千代田1丁目1番1号が坂戸市役所。



原ちず子さんと
語らう

「私も共犯者です」 でも後悔はしていません

漫画家、タレントのはらたいらさんを、妻・アシスタント・マネージャーとして支えながら、二人の娘さんを育てた。2006年11月に死去したはらさんに献身的に付き添い、最期を看取った。1944年生まれ。

昨年の12月12日(日)に集合所で、原ちず子さんと語らうひとときを過ごしました。その時のお話の一部をまとめてみました。これまでの生き越し方と、これからの生き方を考えるよすがのひとひらを、見つけていただけたら幸いです。

坂戸と高知の縁

原ちず子さんが坂戸市千代田3丁目に引っ越してこられたのは、2007年の11月です。

「出版社や雑誌社の編集者が原稿を取りに来てくださるのに便利な東京・文京区に長く住んでいました。はらたいらが亡くなり文京区に居る必然性がなくなり、郊外に住もうと考えたのです」

原さんの次女の麻衣子さん夫妻が鶴ヶ島市でバレエ教室を開いており、お孫さんといつでも直ぐ会える距離になった。

「坂戸市役所に転入届を出しに行った時、市庁舎の正面玄関前にヤマモモの木が立っているのを見て嬉しくなりました。ヤマモモは、はらたいらと私のふるさと高知の県



の花なんです。それに坂戸よさこい祭りがあり、高知ととても縁が深い。千代田公園や散策路の樹木が四季折々に美しく変化する光景を見ながら、

坂戸に移って来て本当に良かったと感じます」高知県は四国山脈を背にして前はそのまま太平洋である。日差しが透き通っている。



「そのせいか明るい県民性で、お茶代わりに酒



はらたいらさんの代表作「モンローちゃん」のよさこい踊り

が出てきます。横山隆一さん、やなせたかしさんなど漫画家を輩出する土地柄でもあるのです」

はらたいらさんが14歳の時の1コマ漫画が高知新聞に載った。仕留めたキツネを担いでいた猟師が、昇天するキツネに引っ張られ空に舞い上がる画で、中学生とは思えない質の高さである。

叱らない母親の役

はらたいらさん20歳、

ちず子さん19歳の時に結婚した。無名だったはらたいらさんはたちまち売れっ子漫画家になる。

「全くの無からアイデアを生み出すために、未知の世界、宇宙の世界、空想の世界で生きているようなところがありました。物事をサカサマに見てギャグを考えると通っていました」

テレビ番組「クイズダービー」で司会者の大橋

巨泉さんが、はらたいらさんを「宇宙人」と呼んだのは、驚異的な正解率の高さだけでなく、本当に宇宙人を思わせるオーラ

を出していたのかもしれない。人見知りな激しい照れ屋のはらたいらさんは、その反動のように原さんにはやんちゃな



駄々っ子のようにわがままを通し続けた。原さんはそのわがままを全て受け入れて「叱ら

ない母親」の役目に徹した。長年の飲酒による肝機能障害で医者から禁酒を言われストレスを募らせるのを見て、「主人が自分からやめない限りは大好きなお酒を飲ませてあげ



る」と決心する。だからはらたいらさんが亡くなった直後に出版した著書「はらたいらに全部1夫の愛し方看取り方」で、「主人の死は、私も共犯者」です」と書いてい

る。命の「時間」より、好きな「酒」を選んだ夫婦の確信的共犯である。

明るく元気に余生を

「地球上に60数億の人間が住んでいます。100年後には現在生きている人のほとんどが居なくなっています。死は必ずやってきます」

欲しいものを意のままにした秦の始皇帝でも、「不老不死」を手に入れることができなかった。日本人は、平均寿命が50

歳だったところと比較すると寿命が30年延び、「長

寿」を掌中にした。それだけ見聞や体験を楽しむ時間が増えた。でも同時に肉親や自分の「死」を考える時間も増えた。「長寿」は、死と向き合い思考し精神を洗練する修行との引き換えのようにも思えてくる。

「娘たちに言い遺したいこと、伝えたいことを記述した手紙を作っています。坂戸市内のセレモニアに行つて、自分の仕舞い支度を相談してきました」

そう語る原さんの表情に暗さは少しもない。「はらたいらの元に行つても構わない。でも私は未亡人の文字をサカサマに捉え、亡き夫の分まで生きるという意味に解釈しています。一生懸命に明るく生きて、元気に余生を送ります」

そして原さんが最後にこう締めくくった。

「会場の皆さん全員の顔を私は覚えられません。皆さんが私の顔を覚えてくださり、外で会ったからお声をかけてください。一人でも多くの人と知り合いになりたいのです」

家なしキリギリス

浅見金重さん(26号棟)

辞書を覗くと「終の栖」とは「最後にすむ所」だという。人生の終末に開るもつと深遠な解説があるかと期待していたのにがっかりである。懲りずに漢和辞典を見ると、栖にはやすむ、憩うなどの意味がある。それぞれの人の最後にたどりついた憩いの場、肯定的な家の

『あなたの終の棲家とわたしのふるさとについて考えてみよう』

イメージが結べる。これなら解かる。ところで私も現在のこの住居が、見果てぬ夢の最後の一夜の宿り木と覚悟している。そうではあるが、私は屈託して心にやすらぎはない。蔵書の山をどうするか。妻は自分のほうが長生きするつもりであったのか、よく言っていた。「本をどうするか決めておいてね」愛書と呼ばれていても、大地震にでも

遭えば、本はなだれのように崩落し、凶器と化して人を襲う。かくして終の栖も私には安住の家ではなさそうである。ところで私は、今はどこをどうひたすら歩いてきたのか辿り直すこともできない。茫々たる過去の薄闇に戸惑うばかりであるが、けつまずいた古本の角でいため左の小指をさすりながら、私は、痛切な郷愁と悔恨の大波にさらわ

てしまいました。当時の8号棟には20人の子どもがおり、新年会、高麗川の川原で



心に響くすてきな原稿をありがとうございました

だ思い出がいっぱいあります。テラスハウスに移ったのは18年前です。団地全体が静かになりましたね。多くの所帯が集まっている団地の“地の利”を活かして、声を掛け合い顔を見せ合い、無縁社会とは無縁の団地を作ってあげたらと思うのです。

焼きたてのトウモロコシ

荒井満寿美さん(14号棟)

現在の団地内の樹木や草花は、当初の緑地設計と全く違う風景になっている。緑地の多くが駐車場に変ってしまった。丹精を込めて手入れしてきた樹木が次々と消えていく時は、さすがに辛かったなあ。

団地中央にある4本の桜は、当時の小学生たちの進級祝いに植樹したものです。集会所前の道路の杏は、団地と道路の境界を緑並木にするために植えた。杏の木は立派に育っていい外観を作ってくれている。嬉しいねえ。子どもたちの思い出づくりにと始めた夏祭りはずべてが手作りで素朴だったけれど、家族的な雰囲気がありました。群馬県片品村の友人の

おふくろさんが、団地の夏祭りのために、毎年5月にトウモロコシの種を蒔いてくれる。無農薬で栽培した虫の入らない粒が光っているいい品種なんだ。夏祭りの前夜に片品村まで車を走らせ、友人宅に泊まり、翌朝5時から友人とおふくろさんと僕と3人で、朝露に濡れながら、600本のトウモロコシをもぎ採り、車に積んで急いで団地に帰ってくる。

夏祭りの会場で、子どもたちは焼きたてのトウモロコシにかぶりついて、そのみずみずしい甘さにびっくりしていた。当時の子どもたちはもう30代から40代だもの。30年の歳月の移ろいの重みを感じますね。(談)

世代を引き継ぐ

牧野勝宣さん(28号棟)

親に連れられて当団地に引越してきたのが小学校に入学する年で、それから30年余りずっと住んでいます。始めは広い家に住めると喜びました。さらに嬉しかったのはグリーンベルトで心おきなくローラースケートができることでした。当時は引越越しに対して寂

しいという気持よりも、行った先で遊べる魅力が大きかったです。今もそういうお子さんはいるのでしょうか。その先には千代田公園があり広く遊べる場所が多く、周辺の環境は大変優れています。今は体が大きくなったこともあり、自分みたいなのが5、6人で一戸に住むには手狭な感があります。暮らして何の不満もありません。様々な改修工事で、設備を整えつつあるのも理由の一つです。今後を考えると、我々の世代が引き継ぎ、何年経っても今と変わらぬ若葉台団地を実現しなければと思います。

2011年の私の希望

大出 野乃花さん(3号棟)

私が2011年にがんばりたい事は、水泳とてつぼうと手芸です。なぜ私がその3つを選んだかというと、水泳はクローラで25mはなんとか泳げるけど、それ以上は苦しくて泳げないから、たくさん泳げるようにしたいし、友達と50m以上泳げる子がいっぱいいるので私も泳げるようになりたいからです。てつぼうは、一空中さか上

【お知らせ】 民生委員の加藤伊津子さん、中祖幸子さんが退任されました。長い間ほんとうにありがとうございました。河野千枝子さん、伊藤慶子さんが新しい委員に就任されました。よろしくをお願いします。

氏名	号棟	電話番号	担当区域
河野千枝子さん	16号棟 305号	283-3861	20~25号棟、27~29号棟、35号棟
伊藤慶子さん	24号棟 501号	289-1238	13~19号棟、26号棟

り」というわざができるようにがんばりたいです。私は手芸は好きだけど、あまり上手にきれいでできなくて、すぐあきてしまうので、たくさんやります。すこしづつうまくできるようになれば、あきないで楽しみながらずつとやっていられると思っただけです。次はなにか自分の生活に役立つ物を作ろうと思っています。2011年の目標がしっかりと決まったのでその目標に向かって1年間がんばりたいです。

若葉台団地の30年略史

- 1976年9月 坂戸市誕生
- 1979年4月 東武東上線 若葉駅開設
- 1979年4月~ 若葉台団地入居開始
- 1980年4月 坂戸市立南小学校開校
- 1980年6月 第1回若葉台団地ソフトボール大会
- 1980年8月 第1回夏祭り(徒渉池使用納めを機に)
- 1980年9月 広報「わかば」創刊
- 1982年4月 公園負担で外壁瑕疵補修
- 1983年5月 理事会運営要綱・棟長会設置など目的別に運用を決定
- 1983年6月 中長期営繕計画委員会発足
- 1984年1月 改正区分所有法が改正
- 1984年7月 駐車場拡張工事
- 1984年11月 第1回若葉台団地運動会・文化祭
- 1986年9月 坂戸市市制施行10周年に際して平和都市宣言
- 1987年1月 文化祭を含め冬まつり
- 1987年9月 第2次各種専門委員会発足
- 1989年8月 鉄部塗装(全棟)
- 1992年 駐車場増設
- 1994年~1995年 大規模修繕工事(外壁・屋上防水)
- 1996年9月 流し排水管改修(17・18・19号棟)
- 2001年~3月 共用給水管・給水設備改修工事
- 2002年 若葉プロジェクト21発足
- 2003年5月 植栽協会の発足
- 2004年11月~2005年5月 集会所増改修工事
- 2004年6月 わかばウォークがオープン
- 2005年9月~2006年5月 計画修繕工事(屋上防水・階段室防水)
- 2005年6月~2005年8月 地上デジタル放送及びBS・110度CS放送対応工事
- 2008年1月~4月 エレベーター更新工事(17・18・19・26・28・29号棟)
- 2008年7月~2009年5月 給排(BEタイプ)水設備改修工事
- 2008年9月 テニスコートリニューアル
- 2009年5月 中長期営繕計画総会で承認
- 暮らしのルール改訂版各戸配布
- 2010年5月 2011年度大規模修繕工事が承認
- 2010年7月 新修繕委員会発足



若葉台団地の住み心地

冬の早朝、千代田公園を背に正面に富士山を眺めながら、木枯らしの吹くメイン道路を若葉駅に向かって会社通勤に励んでいました。最近富士山の姿を女子栄養大学の校舎が遮っていますが、萎える気持ちを支えてくれた富士の眺め、当時は良いところに引越してきたとの思いでした。

住む人の知恵に感謝

引越してきた時には驚かされました。生まれも、育った環境のまったく異なる人たちの集合体は、心情のみならず、主義主張と考え方の違いに戸惑いさえ感じられました。でも管理組合は、蛇

30年経っても住み良い団地はいろいろ変遷があるものの、今でも「住み良いところ」のイメージは変わらないとあります。千代田公園の四季の移り変わり、樺、エゾ松、杉などの木々は大きくなったものの、何年経っても四季折々繰り返される景色、子どもたち、大人や犬の散歩風景は変わることなく、心を豊かにしてくれます。こうした自然環境も「住み良いところ」の一つでしょう。



かつては大勢の子どもたちが賑わい笑顔があふれていた

行しながらもその進路を間違えることはありませんでした。ゴミ捨て場や団地内を清掃する人、ボランティアで木々を伐採する組合員の方々の活躍で、団地は「きれいな」に保たれています。

二度の外壁塗装、鉄部の塗装、給水管の敷設替え、アンテナの設置等、必要な年に合わせて適時に修繕が行われてきました。住んでいる人たちの知恵や心掛けで「住み良いところ」が続いていると思っています。



若葉台団地は当初駐車場が330台でした。最後には889所帯の80

とあります。近年は、駐車場の空きがはじめていますが、若葉駅周辺はわかばウォークを始めとして、すばらしい発展を続けています。鶴ヶ島工業団地がさらに発展し、この団地にも新しい血、生れも育ちも異なる人たちが集まって「活気」が戻ること。それとも私のような高齢者が心静かに暮らせる土地、遠くからでも自ら望んで引越されて来られるような「住み良い棲家」でもありたいと願っています。

昭和60年ごろ、世の中の景気も良く「団地立て替え論」もありました。今年はまだまた大規模修繕が待ち構えています。いろいろな知恵で「住み良いところ」が続くことを期待しています。世に誇れる団地になっている

近未来のビジョン 近年は、駐車場の空きがはじめていますが、若葉駅周辺はわかばウォークを始めとして、すばらしい発展を続けています。鶴ヶ島工業団地がさらに発展し、この団地にも新しい血、生れも育ちも異なる人たちが集まって「活気」が戻ること。それとも私のような高齢者が心静かに暮らせる土地、遠くからでも自ら望んで引越されて来られるような「住み良い棲家」でもありたいと願っています。

編集後記

30数年の歴史の中で周辺の状況は随分変わりました。ふるさととは自分が生まれ育った所で帰ることの出来る場所があるということかも知れない。彼女の演奏を聞きながらふとそんなことを思ったのです。今回は多くの方に協力をお願いがとうございました。(佐藤公子)

●12月23日4人によるフルートアンサンブル楽々LaLaのコンサートがありました。今年で2年目ですが、その中のお一人はこの若葉台団地で生まれ成長された方です。その場所を忘れることなく私たちに生の音楽を提供してくれたのです。懐かしい曲ばかりで心を癒してくれました。今号は大規模修繕工事を前に、「ふるさと」としての団地、終の棲家としての団地を考える」をテーマとして編集をしてきました。飛行場跡地の原っぱだったこの場所に新しい駅や小学校が作られそこに建つまぶしく子どもたちの声も響きあっていました。